

私がんばっていること

御厨小学校五年 久保結優

私は、小学一年生のころからバイオリンを習っています。バイオリンを始めたきっかけは、おばあちゃんといっしょにコンサートを見に行ったことです。コンサートでは、楽しそうに弾いているバイオリニストを見て、私もあんな風に弾いてみたいと思いました。

低学年のころは、やさしい曲を楽しく弾いていました。中学年で少しずつむずかしい曲に挑戦していくようになりました。高学年になり、お母さんから、

「目標をもって練習してみたら」

と言われ、コンクールに挑戦することにしました。

楽しく弾くことから、コンクールに出場することに目標が変わり、練習する時間も前よりふえました。うまく弾けなくて、なみだを流してしまうこともありました。

夏休みが始まって最初の土曜日に、一つ目のコンクールがありました。私は、ヴィヴァルディの協奏曲を弾きました。とてもきん張してしまい、練習よりもスピードが速くなってしまいました。ピアノの伴奏の音も聞こえなくなってしまうました。その結果、予選落ちをしてしまいました。帰りの車の中で、お父さんとお母さんが、「ここまで努力してきたことが何より大切だし、力になっていると思うよ。」

と言ってくれました。

私は、くやしくて車の中で泣いてしまいました。くやしくて泣いたのは初めてでした。

その日から、どんな風に弾くことが正解なのか分からないまま時間が過ぎました。フォルテのように強く弾こうとすると、力が入りすぎて音が割れてしまったり、ピアノのように弱く弾こうとすると、音が小さくなりすぎたり、うまくいかない自分になりました。そんな時、バイオリンの先生から、

「音楽という字を思い出してごらん。音を楽しむと書いて音楽だよ。だから、この曲を楽しんでほしい。この曲は、バイオリンとピアノの協奏曲だから、ピアノをよく聞いて、お互いによい音を出せるように楽しんでごらん。」

と言われました。それまでの私は、自分が弾くことに精一杯で、音を楽しめていなかったし、ピアノの音も聞けていなかったなと気がつきました。そこから気持ちを切り替えて練習しました。

ピアノとバイオリンが合わさると、とても楽しいです。まるで、ピアノとバイオリンがおしゃべりしているようなのです。

前回のコンクールから三週間がたち、二回目のコンクールに出ました。ぶ台そでで待っている時、心ぞうが飛び出しそうなくらいドキドキしていました。自分の番がきて、ぶ台に立つと、手が氷のように固まってしまいました。でも、弾き始めたら、練習していたとおりに弾くことができました。

そして、結果発表の時、弾く時と同じくらいきん張りました。今

回は、予選を合格することができました。お父さんとお母さんと三人で大喜びしました。

一回目のコンクールで落選した時、次も無理なんじゃないかとあきらめそうになったけど、あきらめなくてよかったと思いました。

こうしてあきらめない心があったのも、お父さんやお母さんやバイオリンの先生、私を応援してくれるみんなのおかげだと思いました。

まだまだ課題も多く、やるべきことはたくさんあります。コンクールの本選は二か月後なので、私の挑戦は続いています。これからも音を楽しむ気持ちを忘れずに、がんばっていきたいと思います。